

い
飯

だ
田

(じょう)
城

せき
跡

2002年3月

長野県飯田市教育委員会

い だ じょう せき
飯 田 城 跡

2002年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田城跡は飯田市街地の東端に位置し、南側に飯田松川や罪地区を見下ろす高台に築かれた飯田藩1万石の居城です。当時の城の様子を偲ばせる場所はほとんどありませんが、市立図書館横の赤門、追手町小学校周辺で見られる堀跡等がわずかに城の面影を感じさせてくれます。

西側に広がる現在の市街地は近世における城下町から発展したものであり、昭和22年の飯田大火で市街地の大半を焼失したとはいえ整然と区割りされた町並みの様子は往時を偲ばせる城下町の様子を残しています。

市街地周辺は大火によって多くの文化財が失われ、城下町以前の姿は断片的に把握されているのみですが、旧石器時代以来連続とした人々の営みがあったことがうかがえます。今回発掘調査を実施した飯田城跡は出丸部分に位置し、西側で堀の一部等を確認しました。飯田城跡に関してはこれまで昭和61・62年の美術博物館建設に先立つ調査で二の丸、本丸部分が、平成2年度の調査で出丸側石垣が確認されており、部分的ではありますが城の状況が明らかにされてきました。これらは私達の地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のまま後世に伝えることも大切ですが、現実の生活に対応してよりよい社会生活を求めていく権利も尊重しなければならない一面もあります。したがって、現実社会においては文化財の保護と開発という相容れない事態に直面する事が多くっており、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることで後世に埋蔵文化財を残すのも一つの方法といえます。

文化財の保護と活用は文化財行政の大きな課題です。幸い市民の皆さんの活発な生涯学習、地域学習の中で、自分達の先人が残した文化財や地域の歴史を学びたいという欲求は大きくなっています。私達文化財行政、教育行政に携わる者はこのような要望に応えられるよう市民の皆さんにご理解をいただき、一体になった取り組みができるよう一層の努力をしていかなければなりません。

最後になりましたが、調査実施にあたり文化財保護の本旨に多大なご理解とご協力をいただいた追手町小学校をはじめ、本調査に関係された全ての皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成14年3月

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰 啓

例 言

1. 本書は、市立追手町小学校昇降口改築工事に先立って実施された飯田市追手町所在の埋蔵文化財包蔵地「飯田城跡」の発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会が直営で行った。
3. 調査は、平成12年度に現地調査を、平成13年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業及び、整理作業にあたり、遺跡略号をIIDJとして使用し、遺跡の中心地番である673-1を略号に続けて付した。
6. 本報告書では以下の略号を使用している。尚、番号については「出丸」内の遺構数を基準とした。
石組遺構・溝—SD 竪穴遺構—SK
7. 土色の色調・土性は『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
8. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により佐々木・坂井が行った。
9. 本書の執筆と編集は担当調査員の協議により第1章を坂井が、第2・3・4章を佐々木が行い、小林正香が総括した。
10. 本書の写真について、遺構は佐々木・坂井が、遺物については西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からのそれぞれの穴の深さ(単位cm)を表している。
12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市川路1004-1番地飯田市考古資料館で保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
第1章 経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	1
第4節 調査の概要	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 自然環境	5
第2節 歴史環境	5
第3章 調査結果	8
第1節 調査区の設定	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構・遺物	8
1. 遺構	8
1) 堀跡(機堀)	8
2) 暗渠(石組遺構)	10
3) 土坑	10
4) 追手町小学校	11
2. 遺物	12
1) 磁器	12
2) 陶器	12
3) その他	14
第4章 まとめ	15
写真図版	17

第1章 経 過

第1節 調査に至るまでの経過

平成12年4月24日付けで飯田市教育委員会(学校教育課)より埋蔵文化財発掘の通知が提出された。内容は飯田市追手町に所在する追手町小学校昇降口建替事業であり、当該地は埋蔵文化財包蔵地「飯田城跡」内に位置し追手町小学校は飯田城の出丸跡に立地している。よって関係部局と協議をした結果、発掘調査を行い記録保存をすることとなった。

第2節 調査の経過

以上の経過を経て、平成12年6月2日に調査対象地の旧建物の解体が終了したため7日から8日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行い、その後基準点設置作業及び作業員による遺構検出作業を開始した。堀跡、石組遺構等を検出し、順次掘り下げて精査を行い全体及び個別の測量調査、写真撮影を実施して同年6月26日に現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業・出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業・遺物実測・写真撮影作業・第2原因の作成・トレース・版組等を行い、平成13年度に発掘調査報告書を刊行した。

第3節 調査組織

1. 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 富田 榮啓							
調査担当者	佐々木嘉和		坂井 勇雄					
調 査 員	馬場 保之	益谷恵美子	吉川 金利	下平 博行	伊藤 尚志			
	福澤 好晃	羽生 俊郎						
	藤原 直人(長野県埋蔵文化財センターより派遣 平成11・12年度)							
作 業 員	新井 幸子	新井ゆり子	池田 幸子	伊東 裕子	太田 沢男			
	金井 照子	唐沢古千代	北原 裕	木下 早苗	木下 玲子			
	小平まなみ	小林 千枝	斎藤 徳子	佐々木真奈美	佐藤知代子			
	関島真由美	瀬古 郁保	高木 純子	竹本 常子	橋 千賀子			
	田中 薫	筒井千恵子	中沢 温子	中田 恵	中平けい子			
	中村地香子	林 勢紀子	林 ひとみ	原 昭子	樋本 宣子			
	平栗 陽子	福沢 育子	古林登志子	牧内喜久子	牧内 八代			
	松下 博子	松島 保	松本 恭子	三浦 厚子	宮内真理子			
	森藤美知子	森山 律子	吉川 悦子	吉川紀美子				

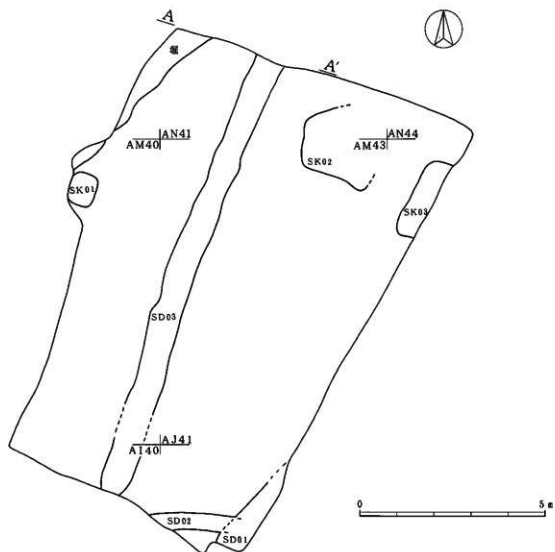
2. 事務局

飯田市教育委員会
教育次長 久保田裕久(平成12年度～)

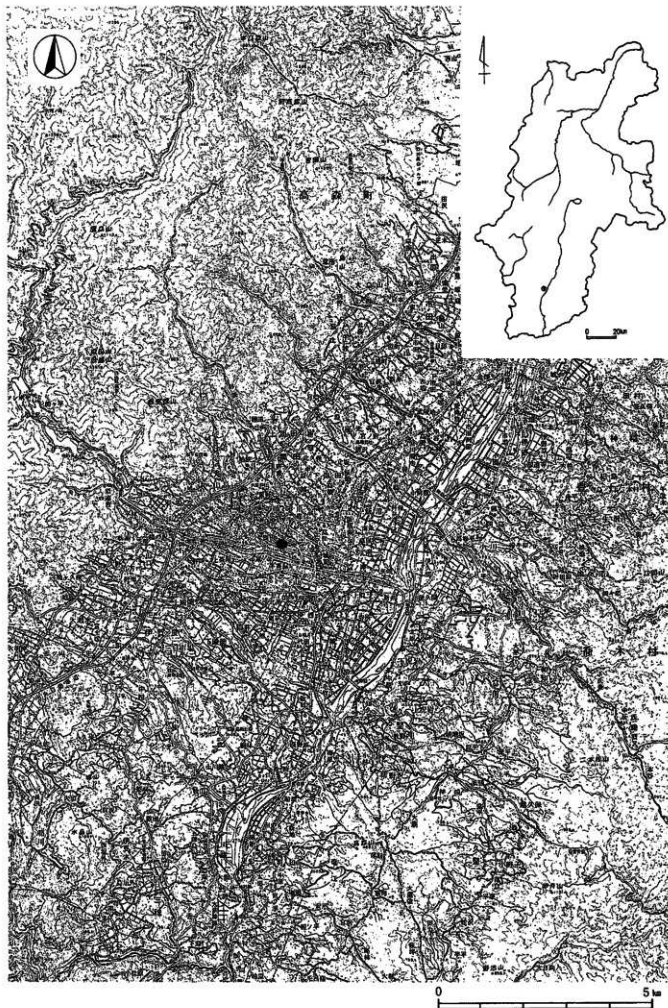
博物館課長 米山 照実（～平成12年度）生涯学習課長 中島 修（平成13年度～）
 博物館課 埋蔵文化財係長 小林 正春（～平成12年度）
 生涯学習課 文化財保護係長 同（平成13年度～）
 博物館課 埋蔵文化財係（～平成12年度）馬場 保之 渡谷恵美子 吉川 金利 下平 博行
 生涯学習課 文化財保護係（平成13年度～）伊藤 尚志 福澤 好晃（～平成12年度）坂井 勇雄
 羽生 俊郎（平成13年度～）
 博物館課 庶務係長 今村 進（～平成12年度）
 同 庶務係 松山登代子（～平成12年度）
 学校教育課 総務係 宮田 和久（平成13年度～）

第4節 調査の概要

今次調査区は飯田市追手町の追手町小学校敷地内飯田城の出丸に位置する。絵図・残存施設により出丸に関わる遺構の確認が当初より予想された。その結果、堀切の肩部分・石組遺構・陶磁器類等を確認した。



挿図1 全体図



挿図2 調査遺跡位置図



1. 今次調査地点 2. 櫓堀 3. お亭堀 4. 北堀
 5. 南堀 6. 追手御門 7. 桜丸御門(赤門) 8. 出丸御門
 9. 水の手御門 10. 二ノ丸御門(八間門) 11. 喰違門(冠木門)
 12. 本丸御門 13. 水汲門 14. 埋門 15. 御裏門

水堀
 空堀

挿図3 調査位置及び周辺遺跡地図

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市の位置する伊那谷は、南アルプス前山の伊那山脈と中央アルプスに挟まれた細長い盆地である。その中央を諏訪湖を源とする天竜川が南流し、両岸は活断層による落差のある段丘になっている。各段丘は両山脈からの河川に開析され、山麓に扇状地が発達する。

飯田旧市は南西の飯田松川を挟んで帯地区と、北東～南の野底川を挟んで上郷地区と接している。旧市街地の段丘上は俗に「丘の上」といわれ、河川の開析により段丘端は大きく切れ込んでいる。飯田松川左岸旧市側に氾濫原が幅100m程細長く続いている。野底川は段丘を浸食し、段丘端から南に方向を変えほぼ1kmで飯田松川に合流する。

城跡から北西の山麓までは緩斜面が続き、本来の段丘地形そのもののあり様ではない。これは風越山山麓からの扇状地が発達したことによって上位の段丘が覆われた為である。また、市街地化によって地形の微妙な変化の判断も困難となっている。

飯田城跡は自然地形を利用して築かれており、段丘端に位置する。南西は飯田松川に、北東は小河川の谷川に挟まれ、南東の段丘端部を先端にして三角形に広がる。河川に開析された崖は急で先端部の比高差は60mを測る。北西側（市街地側）の城内と城下を区切る堀の周辺はかつて堀端と呼ばれ、現銀座通り東側の屋並下に痕跡を留めている。

南西側飯田松川に落ちる斜面は、飯田市の地滑り地域に指定されており、防止工事が繰り返されている。

第2節 歴史環境

飯田市街地は、前項自然環境で記したように緩傾斜の面であり、随所に古い生活の跡が残っている。この面でもっとも古い生活痕は、飯田市美術博物館建設に先立つ発掘調査で、二の丸跡から約15000年前の後期旧石器時代の細石核が確認されている。

縄文時代になると各所に生活痕が確認されており、美術博物館の調査時にも打製石斧が出土した。風越山の山裾部に点在する正永寺原・押洞などの諸遺跡から早期の押型文土器が出土している。又前期～晩期に至る縄文時代全体を通じて地形の変化によりその立地条件は様々であるが、遺跡がほぼ全域に分布している。縄文時代の遺跡分布の主体は風越山麓よりにあるが、市街地の一面である大門町にも縄文時代中期中葉の住居址が確認されており、古くからの市街地の地下にも縄文時代の人々の生活痕が残っていると思われる。

弥生時代～古墳時代は水田耕作が主力で、湧水に依存するため風越山の山麓・扇状地端部での豊富な水を利用し、羽場地区の権現堂前遺跡や丸山遺跡ではかなりの規模の集落が発見されており、本町の飯田城下町遺跡からも方形周溝墓が確認されている。これら断片的な資料であるが上飯田地区のほぼ全域が弥生時代～古墳時代には安定した生活場所といえる。

奈良時代～平安時代の状況は不明であるが、箕原遺跡で平安時代後期の住居跡等が確認されており、古墳時代に引き続いて生活が営まれていたと考えられる。平安時代中期以降武士階級が起り各々荘園

を基盤にしたが、当地は郡戸庄（ごうどのしょう）に含まれていた記録がある。中世には、飯田城・愛宕城・上飯田の城山・虚空蔵山頂などに山城が築造されているが、詳細な時期は不明である。

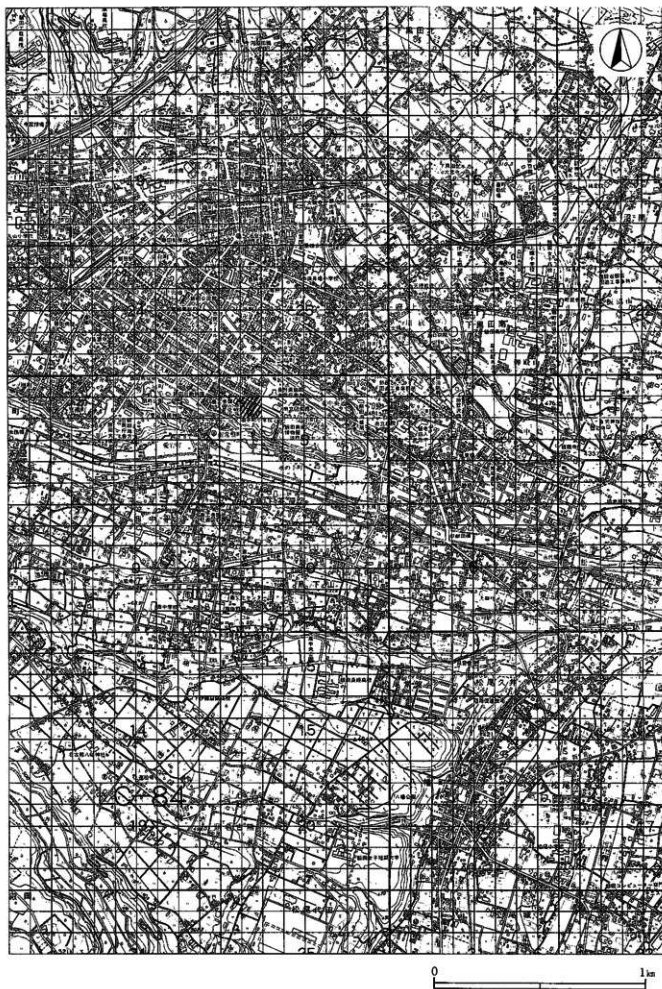
調査地点は飯田城の出丸の一角であり、飯田城主の変遷概略を記述する。

当城が伝承に登場するのは室町時代であり、現在の愛宕神社の場所に城を構えていた坂西氏が城を移したと伝えられている。その後、武田信玄が下伊那を制圧し飯田城には伊那郡代として秋山信友が入城した。天文19年から天正10年の武田氏の滅亡までおよそ33年間支配下にあったという。武田氏滅亡のあと、信長の臣毛利秀頼が伊那全部を与えられて飯田城主となったが、わずか3か月足らずで信長が本能寺に倒れ、秀頼は京に走ってしまう。天正18年秀吉から毛利秀頼が十万石を与えられて城主となったが、3年後の文禄2年に没し娘婿の京極高知に引き継がれた。関ヶ原の合戦後、京極氏が去って小笠原秀政が入り、慶長18年秀政が松本城に移り、元和3年脇坂氏が入った。その後堀氏が寛文12年に移ってきてから明治にいたる200年弱当地を治めていたのである。

武士の時代が終わり、明治時代になると学校敷地になり現在迄続いている。追手町小学校は、追手門跡に設立された旧飯田藩文武所を改造して、明治5年筑摩県管内三十番小学校として開校した。同25年高等科を併置し、現在の位置に移り飯田尋常高等小学校と改称した。昭和4年には、現在の鉄筋コンクリート三階建てが新築され、昭和22年飯田市立追手町小学校と改称した。

今回の発掘調査地点は校庭の北西端で飯田城出丸を画する掘（けやき）堀の肩に当たり、用務員室・作業場・職員通用口を取り壊し、昇降口を作る予定地である。

以上のように飯田城の出丸は、城・学校と2回の変遷をたどる。北西側の掘堀は水の手から今回調査地点までは原形を保っていると思われる。古絵図面によると、調査地点から東に向きを変え出丸の北東を区切り、二の丸御門の前まで延びているが、この部分は現校舎の下で不明である。



挿図4 基準メッシュ図区画調査位置

第3章 調査結果

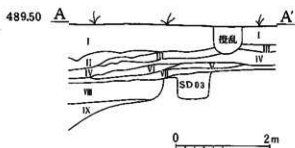
第1節 調査区の設定 (挿図4)

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財規準メッシュ図(以下規準メッシュ図と略す。)に基づいて行った。今次調査地点は挿図4に示す地点である。

第2節 基本層序 (挿図5)

AO41・AO42で基本層序確認のための調査区を設けた。

現地表から、堀が掘られたローム層(地山)まで約1.3mであるが、すべて造成を受けた攪乱土である。堀(機堀)は明治4年に近隣の領民によって埋め立てが行われ(X層)、明治25年、飯田尋常高等小学校が移ってきたおりにその上を整地したと思われる非常に堅くなっていた。(Ⅶ・Ⅷ層)Ⅶ層から上部は昭和4年鉄筋コンクリート校舎建築時の造成で、土層断面から奥3mには、地下室がありその土を埋め立てたものであろう。



- I～Ⅵ 昭和期造成土
- Ⅶ～Ⅷ 明治期造成土
- Ⅸ 明治4年埋立土

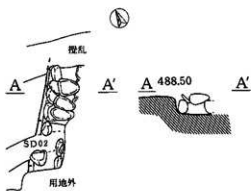
挿図5 基本層序

第3節 遺構・遺物

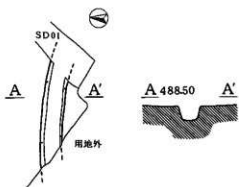
1. 遺構

1) 堀跡(機堀) (挿図6)

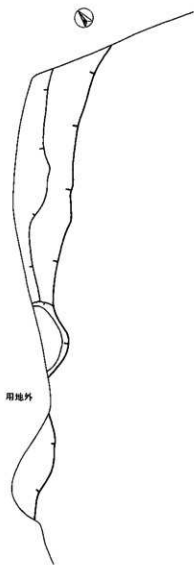
調査区の北隅で確認した飯田城跡に関係する遺構である。確認範囲はわずかであるが、長さ6m 最大幅1m 地山面からの掘り込み1.2mを調査した。調査区部分の堀は埋められており、調査区外の北西側約5mで現在石垣になっている。堀の法尻に石垣を積み、裏面を造成土で埋めたものであろう。調査区の外側の石垣は3.6～2.6mの高さがあり、堀の傾斜は調査区内では緩い。石垣が法尻に築いてあるとすれば、45°を越す堀の壁になり、その内側に土留ないし土塀が考えられる。堀の現存状態は今回の調査地点側が石垣で、堀の底部は幅3.5mあり現在コンクリート舗装がされている。調査地点の反対側は底部から1mの擁壁が垂直に立ち、上端から斜めに堀の壁(ローム)がのび、擁壁から水平距離にして5mで地表に達する。現在の堀の壁は相当に緩くなっていると思われ、往時はU字形の堀で壁は急であったと推測される。



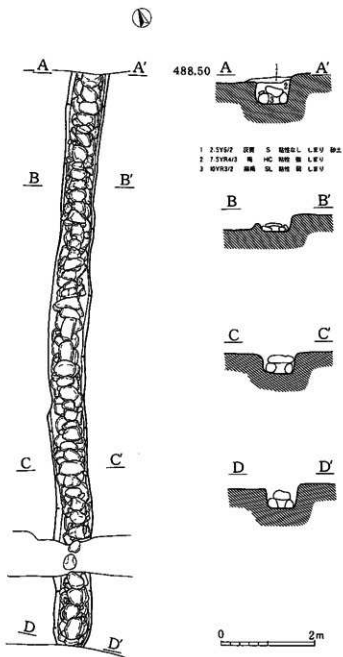
SD01



SD02



堰跡



SD03

- | | | | | | | |
|---|----------|----|----|-----|-----|---|
| 1 | 2.5Y5/2 | 砂層 | S | 磁器土 | LEU | 砂 |
| 2 | 7.5YR4/3 | 腐 | HC | 砂層 | LEU | |
| 3 | 10YR3/2 | 腐 | SL | 砂層 | LEU | |

挿図6 堰跡・SD01~03

古絵図によれば、追手町小学校は飯田城の出丸で、西～北は水堀の掘堀に半円形に囲まれている。東端は出丸御門（鐘の門）の横で収束する。堀の北東側は本丸に通じる道路で、出丸御門を入ると枳形になり本丸側の右にずれて、二の丸・本丸に続く二の丸御門（八間門）に達する。これらは美術博物館建設に先立つ調査で確認されている。二の丸御門の両側は堀で、南西側は空堀、北東側は水堀と伝わっているが水堀の確認は無い。

2) 暗渠（石組遺構）（挿図6）

①SD01

調査区南隅で約3m 確認した三方に石を組んだ暗渠である。昭和4年のコンクリート校舎屋上排水の溝に切られており、もう1本SD2にも切られる。南東側石は調査区外にかかり、掘方幅は不明である。蓋石上面から底まで約20cmで水の通る空間は10cm前後である。掘方はローム層を掘りこんでおり、蓋石の上10cmに非常に堅い面がある。

時期は遺物の出土が無い為不明であるが、飯田城出丸に関係する施設である。

②SD02

調査区南隅で約3m 調査した。幅50cm深さ40cmでSD01を切っており、ローム層を掘り込んだ素掘りの溝である。水の流れた痕跡は無く用途不明であるが、腐食してしまう種があったのかもしれない。

時期は不明であるがSD01を切っており、それよりやや新しいが飯田城出丸に関係する施設である。

③SD03

調査区の中央をほぼ南北に縦断していた。確認した長さ14.5m・掘方の幅80～75cm・深さ50～30cmを測り、三方石組の暗渠である。蓋石上面から底部まで40～25cmで、空間は20～15cm・空間の幅20cmである。コンクリート土管の入る溝に切られる。築造してある石は、大多数が転石であるが蓋石には加工したものも混じり、ほとんどが花崗岩である。蓋石を覆った土が約10cmあり、その上に灰黄色砂が10cm前後堆積しており、幅は掘方より少し広い。暗渠のような形態であるがその用途は不明である。

時期は遺物が無く不明であるが、砂の堆積状態から飯田城出丸に関係する遺構である。

3) 土坑（挿図7）

①SK01

堀の肩に検出した土坑である。90×75cmで、ほぼ方形の平面形をもち深さは50cmある。性格は不明であるが、堀の肩でありそれに付属する土坑であろう。

②SK02

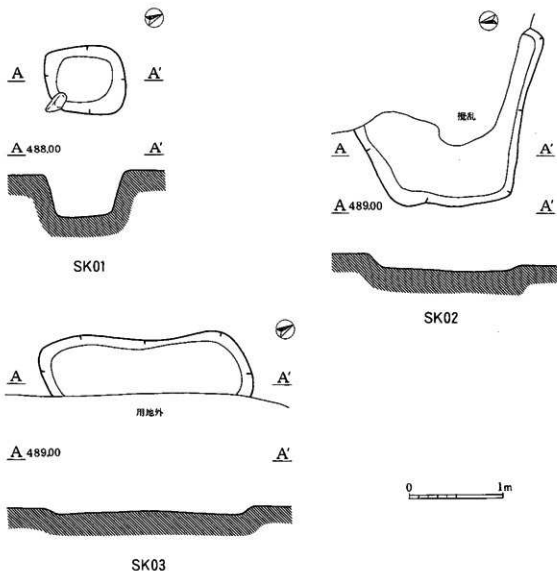
調査区東隅近くに検出した不整形の土坑である。掘りに半分以上を切られ、調査できたのはわずかである。現存部は台形、1.8×(1.75)m深さ20～10cmである。底部はロームで良好であったが、時期・性格共に不明である。

③SK03

調査区東隅近くに検出した不整形の土坑であり、調査区外に1/3 かかる。2.2×(0.6) mで深さは10cm強である。底部はロームで良好であったが、時期・性格共に不明である。

4) 追手町小学校

調査地点はもともと用務員室、作業場などがあり、地下の基礎部分には造成土などが厚く堆積していた。その中で小学校に関わる遺構と確認できたのは、暗渠SD03を切るコンクリート土管を伏せた溝である。径20×長さ100cmのコンクリート土管を継いだ排水坑であり、長さは7mを測る。この土管の西端近くに縦に1本径10cmの陶器土管が継いであった。コンクリート土管は風化が進み脆くなっていたが、鉄筋コンクリート校舎屋上などからの排水用の溝として使われていたと考えられる。その他の痕跡としては、断面で確認したグランドと思われる堅い整地地面である。



挿図7 SK01~03

2. 遺物

1) 磁器 (挿図8)

図化できた磁器は9点であり、碗(1・2・3)、徳利(4)、鉢(5・6)、茶碗(7・8・9)、盃(10)である。碗1は器高6cm・口径11.3cm・底径4.6cmの染め付けで、呉須で外面に山水・内面上部に幾何文様を施している。内面幾何文様は、飯田藩御庭焼きの風越窯に類例があり、風越焼の可能性がある。碗2は底径4.1cmで他は不明の上絵付けである。外面高台に1本・底部に2本の赤で線が引かれそれより上に松・梅が施される。松は葉と細い幹が黒で、太い幹は外線黒内面薄い赤が施される。梅は幹と花の外線を黒で描き花の内側に薄い赤と濃い赤点を施す。濃い赤の横線と花の点以外は剥落して薄く残るだけである。碗3は縦長状のわずかな残存である。推定口径径9.5cmの染付けで外面に箱東文、見込みに呉須がわずか見える。焼成がややあまく胎土は軟らかく感じるが、貫入が入る。

徳利4はベタ底で、器壁は薄く外面下部に呉須で幾何文様を施し現存上部にわずか菊花文が見え、推定底径5.6cmであり推定高は20cm前後と考えられる。

鉢5は推定底径6.2cm外面に呉須の濃淡で草花文が施されるがハッキリした種類は不明であり、高台に直線2本が引かれる。鉢6は1/3現存しており、胴部直径7.5cmで直に立ち口径は内側に傾斜し、染付円形小形段重の可能性があり。外面に花文か雲文が施される。

茶碗7は下部半分が残っている。外面に胴と高台際2か所の施文帯がある。共に赤線で幾何文様が施される。高台内に銘「飯」が有り風越焼の可能性があり。茶碗8は1/3現存し、型絵の染付けで罌・菊花手毬・梅花花文が施される。高台は蛇目で幅が1cmあり畳付けには墨が付着している。茶碗9は上部1/3が現存しており、内外面絵文の染付けで藍色の発色が良く外面現存最下部に草文らしい染付けの断片が見えている。口紅の茶色は濃く、呉須の下に掛けてある。

盃10は図化部分についてはほとんど現存している。染付けで外側のみの文様であり、高台と坏下部の横線の間に幾何文が施される。器壁・高台共に薄く作られており、高台内に銘「青」が有り風越焼の可能性があり。

2) 陶器 (挿図9)

図化できた陶器は13点である。茶碗(1・2)、盃(3)、皿(4・5)、急須(6・7)、こね鉢(8・9)、大皿(10)、すり鉢(11)、蓋付壺(12)植木鉢(13)である。

茶碗1は高台と胴下部がわずか現存する。白釉が全面に掛り、やや艶が少なく貫入が入る。鉄軸の文様がわずか確認できる。茶碗2は1と同じ現存状態である。外面は鉄軸で花文が施されその花文の無い部分に緑〜青緑の青織部釉が施される。内面と高台内は淡黄色釉が掛けられ、軸葉が垂れて厚い部分は白色になっている。

盃3は高台から斜めに立ち上がる。胎土は灰色で細かく、外面は放射上に掻目が施され、ロクロの沈線が引かれる。軸葉は内外面に掛り、灰白色に黒褐色の微細な胡麻が多量に入る。

皿4は1/5現存し、想定口径13cm・底径6.6cm、灰軸陶器で内面には呉須の草文が施され口径にも呉須が塗られている。呉須は全体的に薄くかすれている。皿5は図化部が現存しており、鉄絵で帆掛船と波が描かれ、灰釉が掛けられている。

急須6は焼締めで、注口上に藁掛けと言われる技法の火樺状の茶褐色釉が横にあり、その付近は赤褐色に発色しており、胎土は黄褐色で微細である。急須7は型作り焼締め、外面は陰刻押印菊花文の間全面に細かな布目が付いている。両面共に紫褐色を呈し、胎土は紫灰色微細で良く焼きしまっている。

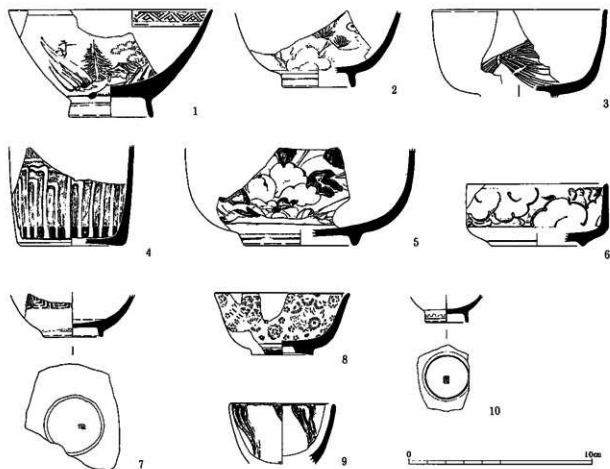
こね鉢8は9と共に現存はわずかである。共に灰釉が施されるが胎土の色が違うので、釉の色も異なる。8の胎土は褐白色でやや粗く、「す」が入っている。釉は褐白色で、内側の釉には澁がない。9の胎土は淡青白色で白色砂(0.5~2mm)がわずか混入し、釉は淡褐緑色で枯葉色を呈する。見込み現存部に釉の無い所があるが、重ね焼きのためであろう。

大皿10は底部1/5が現存し、灰釉が掛り見込みに重ね焼きの貝目が残る。胎土は淡褐色で「す」が入る。釉の色は青がかった白色であり、場所により厚薄がある。

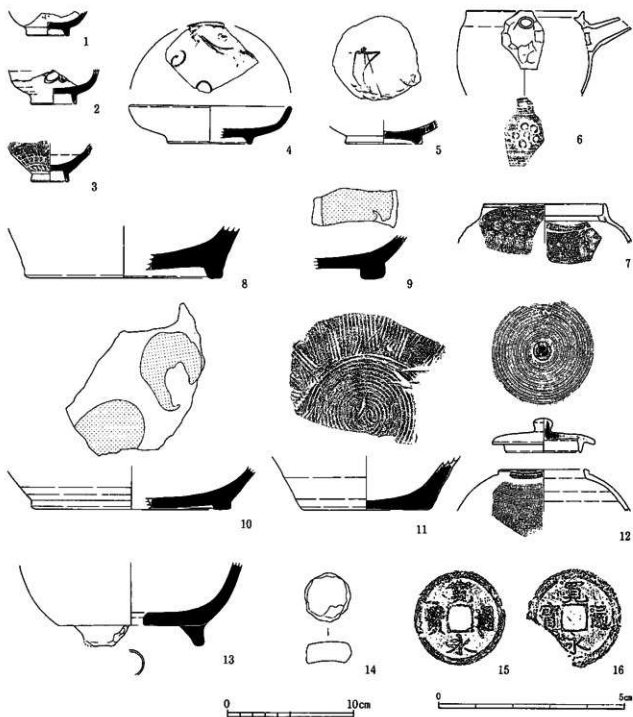
すり鉢11は暗褐色の鉄釉が掛かっている。底部3/4が現存し、良く使用されすり目は磨り減っている。胎土は淡褐白色で「す」がはいる。

蓋付壺12は鉄釉が掛けてあり、鑑文が施されている。蓋と壺は鉄釉の発色がやや異なるが、壺の口縁径と蓋の返りの径がほぼ合い、セットととらえた。壺は口縁部が無釉で内外面鉄釉が施され、蓋は上面のみ釉が掛かる。胎土は白灰色でやや粗いが、焼成は堅緻である。

植木鉢13は想定底部径11.4cmで脚が3個付くと思われる。底の穴は2cm、脚の高さは1.6cmであるが全体高は不明。胴部外面のみ乳白色釉が掛かるが澁は無い。胎土は淡褐白色である。



押図8 出土磁器



挿図9 出土陶器, その他

3) その他 (挿図9)

14は瓦製円形玩具であり、瓦を打欠いてほぼ円形に整えている。直径3.6cm・厚さ1.5cmで、メンコかおはじきと考えられる。15、16は「寛永通宝」であるが、15は「古寛永」16は「文銭」と呼ばれるものである。

第4章 まとめ

調査地点は、古くは飯田城出丸であり明治になって飯田尋常高等小学校、昭和になって追手町小学校へと変遷を続けている。今回調査のまとめとして飯田城の遺構に関し若干の考察を記す。

飯田城出丸は城の創建時から築かれており、当初は城防備の上からも重要な役割を持っていたと考えられるが、時代と共にその役割が変わってきている。江戸時代初期の脇坂～堀時代初期の絵図面では、出丸部分に「上野介様御座所」の書き込みがある。これは城主脇坂安政の兄である元佐倉藩主堀田上野介正信が領地没収のおり飯田藩へお預けになっていた時の邸宅が出丸内にあった事を示しており、その後堀氏時代の延宝6年の火事で焼失した。それ以後は5棟の米蔵が建てられ、領民達がここに米を納めたと言われている。

西～北～東を区切る機（けやき）堀は脇坂時代～明治初期を通して同じ様に書き込まれている。調査地点は機堀に接しており、堀に関わる遺構の発見を期待したが検出は少なかった。確認したのは長さ約6mの堀の肩部分であり、絵図面では東に緩く曲がるが、調査でもそれが確認できた。堀の西端に土坑を検出したが、1基だけであり性格は不明であるが城に付随する遺構である。他にロームの地山面を掘った石組の暗渠2本が確認できたが、通常暗渠は湿地などの排水をして耕作地を作る為のものであり、このような乾燥台地に必要は無い。実際の用途については不明だが三面石で堅固につくられており、堀の土壁ないし土堀の内側の排水に供するために構築した可能性が考えられる。その他、暗渠にほぼ直交するルーム面に掘り込んだ溝を約3m確認したが、暗渠を切っており時期は暗渠より新しい。また、方形竪穴の底部近くと思われる浅い土坑2基を検出したが、両方共にわずかな面積の調査にとどまり性格は不明である。

今回の調査は出丸部分の限られた範囲の全体像を明確にするまでには至らなかったが、調査区の北側隅で堀の一部が検出された。地山を掘り込んだ状態であり、石垣等は確認されなかった。石積み堀かどうかは記録が無く不明であるが、絵図面の形などを見ると素掘りの堀の可能性もある。この堀の延長については絵図面のとおりならそのまま東へ曲がっており、現在の追手町小学校の校舎下に位置する事となる。また、南側は水の手坂に通じる細道へ延びることとなり、現在でもその様相を少ないながらも残していると言える。その他の遺構については、今回検出された石組遺構の性格が不明であり、出丸内の施設との関連性を今後検討していく必要がある。

調査面積が少なく遺構確認はわずかであったが、石組遺構に何らかの生活痕を見出す事が出来た。また、機堀の肩部分を確認でき、絵図面からの推察を位置的に確認できたのは成果である。

飯田城については昭和61年の二の丸、昭和62年の本丸の発掘調査がされており、大通り跡、屋敷跡等が確認されている。また、平成2年の調査では二の丸と出丸を区切る空堀部分の石垣が確認されており、今回が4回目の調査である。二の丸における調査以外のごく小規模であり、城跡の実態解明に結びつく結果は少ないが、大火罹災により大方の文献資料を失ってしまった飯田城については、今後も発掘調査に

よる事実の積み重ねが強く求められていることはいうまでもない。

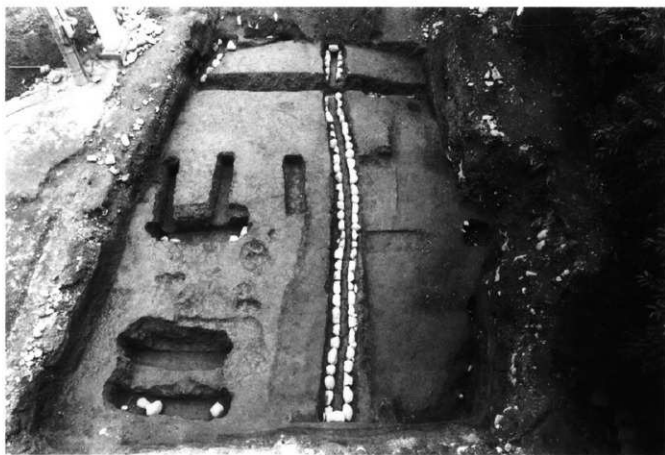
しかし、城内の大半が個人住宅・店舗であり、今後継続しての調査実施は不可能に近いが、再開発等に際して地道な調査活動の展開により、新事実の整理、全体的な検討を行い、飯田市の礎である飯田城の姿を明らかにすることは、文化財保護・活用に課せられた大きな課題といえる。

《 引用 参考文献 》

- | | | |
|-------------|------|----------------------|
| 大沢和夫 | 1956 | 『風越窟遺物発掘記』『伊那』1956-8 |
| 平沢清人 | 1972 | 『飯田城と近世の飯田町』 |
| 下伊那歴史考古学研究所 | 1979 | 『飯田風越窟址』 |
| 飯田市教育委員会 | 1979 | 『風越窟址』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『伝馬町遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『ガンドウ洞遺跡 飯田城跡』 |
| 郷土出版社 | 1996 | 『定本 伊那谷の城』 |
| 飯田市教育委員会 | 2001 | 『飯田城下町遺跡』 |



遺跡通景（東から）



調査区全景（北から）



調査区全景 (南から)



SD01



SD02



SD03



同 蓋石取り外し後



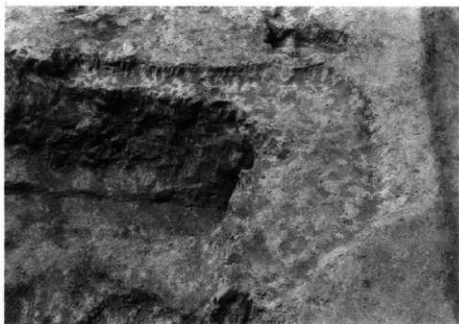
堰跡



SK03



SK01



SK02



重機作業風景



基準点設置作業



作業風景



調査区現状



出土磁器



出土陶器

報 告 書 抄 録

ふりがな	いいだじょうせき								
書名	飯田城跡								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	佐々木嘉和 坂井勇雄								
編集機関	長野県飯田市教育委員会								
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 Tel 0265-53-4545								
発行年月日	2002年3月25日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 名所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
いいだじょうせき 飯田城跡	いいだしおうてまち 飯田市追手町	20205		35度 30分 46秒	137度 50分 3秒	2000年 6月7日 ～ 6月26日	100㎡	小学校 昇降口建替え	
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主な遺物	特 記 事 項			
飯田城跡	城跡	近世	堀跡 石組遺構 溝跡 竪穴		2条 1条 3基	近世陶器/ 陶磁器	飯田城の出丸部分を 調査し、堀の一部を検 出した。		

飯田城跡

2002年3月25日 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印刷 杉本印刷株式会社

